変化の時代における技術開発

取締役社長　川口　文夫

Fumio Kawaguchi
President & Director

「失われた十年」と言われる景気低迷からの脱却と新たなる発展の道を目指し、社会・経済のあらゆる分野で、既存の仕組みの見直し、「改革」へ向けた動きが、本格化しております。

電気事業もこうした大きな変化の潮流の真っ直中にあり、電力自由化は、さらに範囲を拡げることが検討されています。「電気」という商品も、「売れるもの」から「売るもの」へ、さらには「買っていただくもの」へと変化を遂げており、電気の売買に係わる企業間の競争も激化しています。

競争が激しくなると利潤ばかり追い求める余り、ついつい短期的なものの見方しかできなくなりますが、大切なのは「お客さまの目線で考え、お客さまの立場で行動する」ことであり、また、将来を見据え幅広い視野に立った経営姿勢です。

技術開発ニュース100号の発行にあたり、改めて技術への思いを辿りますと、私は、コンピュータ・情報関連業務に長く携わりました。そのなかで設立にも携わったCTI※での格別な思いは、国際分業で作られた米ボーイング社の新鋭旅客機B777の設計を請け負ったことです。シアトルのボーイング社から、あるいは日本の三菱重工などからデータがCTIのコンピュータに送られ、CTIはこれを統合し、紙を使わず、コンピュータの中で、時と場所を越え、設計を支援するという世界初の仕事です。まさに技術革新が企業や社会に及ぼす可能性、インパクトを目の当たりにしました。

そのような経験もあり、技術開発の重要性を、すなわち、企業にあっては、さまざまな経営課題の解決、実現と他社に対する優位性確保のため欠くことが出来ない有効かつ重要な手段であると深く認識しています。

中部電力では、自由化という経営環境の変化に対応するため、電力の安定供給、コストダウンの研究はもとより、エネルギー効率利用、環境保全に加え、さらに電気・ガス・熱などを総合的に利用する新しいエネルギー供給システムの構築や新規事業に資する技術の開発に積極的に取り組む必要があります。特に、技術開発に携わる技術者、研究者には、その能力、感性を高め、積極的な姿勢により新技術、新商品開発で独自性を発揮することを期待しています。

また、中部地域はものづくりの拠点であり、当社事業の拠点でもありますので技術を通じても、その土壌づくりに貢献したいと考えていますが、昨年11月末開始の光通信技術を活用したFTTH事業は、地域での情報リテラシーを高め、企業はもとより家庭、教育、高齢化社会といったあらゆる分野で中部地域の活性化に貢献することを目指しています。

しかしながら、当社は、昨年来原子力問題で、技術に対する信頼に加え、企業としての信頼も揺らぐ事態となっています。

信頼を再び取り戻すには、まず企業の在り方として、「トップと第一線までの距離が近い会社」、風通しのよい会社を作り上げ、そして技術を含め企業としての説明責任を十分果たすことが必要であると考えています。

私がその著書を愛読書とする福沢諭吉は、江戸から明治にかけての大きな変革の時代に生きましたが、物事を例え話で分かり易く解説し、当時の国民を啓蒙しました。この辺りは企業に必要なアカウンタビリティ（説明責任）という意味からも参考になります。

今また変革の時を迎え、彼の言ったことは現代にもそのまま通用するものであり、何度読み返しても感銘し、得るものがあります。

昨年は、日本人がノーベル賞をダブル受賞し、特に、島津製作所の田中耕一氏の受賞は、企業の研究におおいに励みになっています。

独創的な新技術の開発、未踏分野の解明のみならず、埋もれている優れた才能、業績（技術）を発掘し、育てていくことも大事なことであり、また、研究の成果、開発した技術を、企業の経営に生かしたり、社会・経済の成長に結びつけていくシステムづくりも重要な課題です。

現在、社会に閉塞感が漂っていますが、技術革新が、その発展の節目節目を支え、時代を切り拓いてきたことは、歴史が示すとおりです。今、まさに変化の時代であり、技術開発がその役割を果たす絶好の機会です。

※（株）コンピュータ・テクノロジー・インテグレータ　現（株）シーティーアイ